

氏名：荒田 未南美
大学名・学部・学科名：安田女子大学・
文学部・英語英米文学科
派遣先国・都市：タイ・バンコク
派遣期間：28 日間
日付：2012 年 8 月 14 日～9 月 10 日

インターン派遣事業報告書（第 12 条関係）

1. 受入機関の状況

(1) 現地受入大学名・学部学科名：スィーパトゥム大学・バーンケン本校 国際言語文化研究所 日本語科

(2) 日本語教師数：3 名

(3) クラス数と日本語学習者数：
JPN331/日本語Ⅰ 60 名 1 クラス
JPN333/日本語Ⅲ 70 名 2 クラス
初級日本語特別クラス 20 名 1 クラス
合計 4 クラス 150 名

2. 担当した授業の状況

(1) 実習を担当したクラス：JPN333/日本語Ⅲ・JPN333/日本語Ⅱ

(2) 生徒数：20～25 名

(3) レベル（日本語能力）：初級

(4) 担当した授業の内容

日本語 333・ことばの本：使用教材

1 時間 2 コマ：担当時間数とコマ数

教案作成・添削・教材準備 6 日間：授業前の準備

3. 授業前の準備に当たってどのような点に注意したか。また、実際に授業を行って思い通りに授業ができたと思うか。よかった点、悪かった点を挙げながら自己評価してください。

準備に当たって、絵や文字を大きくわかりやすく書くように注意した。絵カ

ードや文字カードの準備不足はあまり無かった。しかし改善すべき点は多くある。まず私の認識不足から、学習者と共通の要素を含む絵カードを使うことができなかった。その為こちらが求める学習者の語彙理解には至らなかった。実際の授業の中でも、絵カードの使い方に問題があった。私は一度に全ての絵を見せてしまったが、それでは学習者の目が散り、私が意図する発話が起こらなかった。また、かばんを2つ書いていたり、部屋の中の装飾をたくさん書いていたりなど無駄な情報を書き過ぎていたことも原因の一つだ。学習者がどこを焦点に置くか、教師からの指示が必要であった。

実際の授業ではなかなか教案通り、模擬授業通りにはいかなかったように思う。学習者へのフィードバックの一つとして、一つ一つ学習者の発話やリピートなどには必ず反応するようにした。褒めることで自信を持ってもらい、日本語を学ぶことに対しての意欲を持ってもらうように心がけた。練習としてリピートをすることは成功したが、間が開くことが度々あり、学習者となかなか呼吸を合わせることができなかった。学習者からどのような反応が来るのか、どのような反応が欲しいのか、どうすればその反応が来るのか。これらに関して、教案を作成した段階で考えが足らなかった。周りが見えておらず、学習者とのやり取りが円滑に進まないことが多々あった。

全授業を通して、授業の前に教案を考える段階での文法、文型理解が弱かったことが一番反省すべき点であるように思う。授業を設計そして実施していく中で最重要事項であり、当然のことである。学習者に何を伝えたいか、というヴィジョンを明確に持ち、授業に臨みたい。

4. つぎの2つの点で、あなたはどのような貢献ができたと思いますか。行った活動を具体的に記して、自己評価してください。

(1) 学生の日本語力や日本文化に関する知識を向上させる

ランゲージパートナーでは学生と日本の文化について話した。日本のアニメについて、大学について、教育についてなど、タイと比較しながら話した。

また、学生が個人的に日本語の既習事項を復習したいということで、その文法について説明した。その学生は最も多くランゲージパートナーとして一緒に会話をした為に、明らかに初めて話した時より聞き取りの力が付いており、話す語彙も増えていった。

(2) 学生の日本語学習に対する意欲を向上させる

ランゲージパートナーで学生と触れ合うことで、学生自ら話す為に会いに来てくれた。中には日本語を勉強するきっかけになった出来事や、今までの日本と自分の関係性をパソコンにまとめて教えてくれる学生もいた。自ら日本語母

語話者と話し、日本語を今まで以上に話す場に参加したいと学生が感じてくれたのだと思う。

5. 授業以外の活動状況：

日付	活動内容	実施場所
8月18日	タイ国日本語教育研究会月例会	国際交流基金バンコク日本文化センター日本語部 E 教室(10F Sermmit Tower, Soi Asoke, Bangkok)
8月23日	他機関の日本語教育の現場視察	サトリーノンタブリー中等学校
8月25・26日	J-education 留学Fair	シリキットコンベンションセンター
8月30日	他機関で学生との日本語での交流(スライドショーによる発表など)	チャンカセム・ラチャパット大学
8月31日	日本文化交流会	スィーパトゥム大学
9月10日	日本文化交流会	スィーパトゥム大学

上記5の補足として、以下の点について書いてください

・学生との交流活動をしましたか：

1度目の日本文化交流会では学生と一緒におにぎりを作ったり、日本の歌を歌ったりした。2度目では、盆踊りを教え、一緒に踊った。

ランゲージパートナーで学生と日本文化やタイ文化について話した。1対1で日本語を教えた。

サトリーノンタブリー中等学校の視察では、中学生と日本人の名前当てゲーム、折り紙で一緒に折り鶴を折りながら簡単な会話。高校生とは日本語やタイ語を使った伝言ゲームを行った。

・日本語学科のある他大学を訪問しましたか：

チャンカセム・ラチャパット大学を訪問し、プレゼンテーションを行った。「広島の大學生の一日」というテーマでプレゼンテーションを行った。学生のタイの観光地についてのプレゼンテーションや、タイのお菓子の紹介、伝統的なタイの歌やダンスを見ることもできた。

・上記の活動を通じて何か得るものはありましたか(しなかった人は何故しなかった)について記述してください。

現地のタイの学生と話すことによって、顔見知りになったり、学生の話せる、分かる語彙を把握できたりした。その為教案を考えやすく、教壇実習の際にも役立った。また、タイ語を学生に直接教えてもらうこともあった。教壇実習やタイで生活する上でも役立ったが、学習者の気持ちを知ることができたという

面で、大変勉強になったと感じている。学習者の苦手な発音なども分かった。

日本文化交流会では約 2 時間の活動を企画し、宣伝、実施した。準備なども全て自らで行った為に、何かを企画し、実行する力が付いたのではないかと思う。交流会で学生が何を求めて日本語を勉強しているのか、また日本語を勉強していない学生の日本に対してのイメージや考えを知ることができた。

日本語学科のあるチャンカセム・ラチャパット大学では、この大学の学生のプレゼンテーションや会の進行をしているのを見ることもできた。4 年生の司会進行には敬語も使われていた。発表の中でお菓子を作ることは、学生自身が考えたことであり、プレゼンテーションの仕方ひとつでも、日本の学生とは異なるということが分かった。

6. 国際交流基金の支援は、どの程度有意義でしたか？あてはまる項目にチェックしてください。

- | | |
|-------------|-------------------------------------|
| とても有意義であった | <input checked="" type="checkbox"/> |
| 有意義であった | <input type="checkbox"/> |
| あまり有意義でなかった | <input type="checkbox"/> |
| 全く有意義でなかった | <input type="checkbox"/> |

上記について、あなたの日本語教育に対する意識や意欲が実習前後でどう変化したかに触れながら、本プログラムへの参加が、どのような点で意義があったか（あるいは意義がなかったか）記述してください。

今まで日本語教育について私の知っている知識はあくまで日本で学んだものであり、現地の現状を目にしたことはなかった。しかしこのプログラムに参加することで、現地の学生と日常的に話すことで現地の学生のニーズ、なぜ日本語を学ぶに至ったのか、日本のどのような文化に興味を持ったのかなど、同世代の学生から聞くことができた。実際今は日本語だけでなく様々な他の言語を学ぶことも重要視されている。しかしその中でも日本語、そして日本について興味を持ち学びたい、日本に行きたいと思ってくれた学生がいることを知りますます日本語教育に私も貢献したいと考えるようになった。

また実際に海外で日本語教師として働いている方々に会えたことが私の中で最も意義のあることの一つだ。スィーパトゥム大学の先生方をはじめ、他大学の日本人の日本語教師の方々に会い、経験談や実際に働いている様子を聞くことができた。日本語教師の立場と同時に、社会人としての対場からお話を聞き、多面的に勉強になったように感じている。またタイの学生や日本語学科以外の先生方とも話す機会があった。人と実際に会って話すというコミュニケーション

ンを取ることで、決して日本では分からないことが現地を訪れることによって分かった。プログラムの間、たくさんの現地の人々と出会う機会があった。日本人とは違うおおらかさ、考え、文化、趣味など多岐にわたって垣間見ることができたと思う。

そして私の中で、いかにコミュニケーションを取ることが重要なことなのかを改めて噛みしめる機会となった。日本語教師である、ということは「日本」について責任を持って異文化の人々に伝えていかなければならないのだと思う。その為にはただ単に日本語に関して知識があるだけでなく、人として真正面に向き合い、コミュニケーションを取る必要があるのだ。日本語教師は異文化と日本との架け橋である。自分自身が生まれ生きてきた国、日本のことを好きだ、魅力を感じると思ってくれる人が一人でも増えることは私にとって、日本人にとって本当に幸せなことなのではないだろうか、私は思う。このプログラムに参加することで、そう考えるようになったことに、最も私は意義を感じているのである。